特集1

生き続ける建築 —9

保岡勝也

Katsuya Yasuoka

突如、住宅作家に転身を図った建築家がいる。保岡勝也である。
記録によれば、大正2年とある。恐らく草分けではないだろうか。
大学では辰野金吾の薫陶を受け、卒業後は三菱に入社する。
曾禰達蔵の後任として順風満帆の活躍をみせていたが、独立し
中小規模の住宅の設計に身を投じ、それを貫いた建築家である。
こだわった理由は不明だが、庶民の住宅に眼を向け、
特に、和洋折衷の小住宅スタイルの確立に努めた。
着眼は時代を超えていたとはいえないだろうか。
市井の人々に住まいへの関心を喚起し、住意識を高めようとした形跡は
数多い出版物の傾向からも明らかである。
波乱に富んだ保岡勝也の足跡を辿ってみた。

“婦女子”の領分に踏み込んだ建築家

内田青蔵
SEIZO UCHIDA

うちだ・せいぞう——埼玉大学 教授／1953年生まれ。1975年、神奈川大学建築学科卒業。1977年、神奈川大学大学院修了。1983年、東京工業大学大学院博士課程満期退学。工学博士。東京工業大学附属工業高等学校教諭、文化女子大学教授を経て、現職。
主な著書：『あめりか屋商品住宅—「洋風住宅」開拓史』（住まいの図書館出版局　1987）、『日本の近代住宅』（鹿島出版会　1992）、『消えたモダン東京』（河出書房新社　2002）、『お屋敷拝見』（河出書房新社　2003）、『同潤会に学べ—住まいの思想とそのデザイン』（王国社　2004）、『「間取り」で楽しむ住宅読本』（光文社　2005）、『学び舎拝見』（河出書房新社　2007）、『なるほど知図帳 日本の建築』（監修、昭文社　2008）など。

■■■

“オフィスビル専門家”から“住宅作家”への変転

建築家の生涯を見ていくと、時期や立場で全く異なった建築を志向した生きざまに出会うことがある。明治期の建築界で絶大な力を持っていた辰野金吾も、そうした建築家のひとりであった。J.コンドルの後継者として留学を命じられ、帰国後、東京帝大教授におさまるものの、50歳を前にその職を辞してフリーアーキテクトとなった。“辰野式”と称される赤いレンガと白い石を組み合わせた軽やかなデザインは、このフリーアーキテクトとしての作風であり、国家を背負っていた時期の重厚な作風とは明らかに異なっていた［＊1］。

保岡勝也も、そうした変転を繰り返した建築家のひとりであった。辰野に席を譲ったコンドルが新たな活動の場として選んだのが三菱合資会社［＊2］（以下、三菱）で、辰野と同期の曾禰達蔵［＊3］が建築部門の丸ノ内建築所の所長となっていた。保岡は、そうした由緒ある三菱に入社し、しかも、曾禰の後を継いで所長にもなった。当時の三菱は丸の内に近代的なオフィス街を開発中で、しかも建築そのものもレンガ造から鉄筋コンクリート造へと移行する、まさにそのただ中で、保岡は陣頭指揮をとっていたのである。しかしながら、明治45年（1912）、突然その三菱を去り、嘱託を1年ほど続けた後の大正2年（1913）に保岡勝也事務所［＊4］を開いた。新しい事務所で扱った建築は、上流層の大規模な屋敷もあったが、保岡が力を注いだのは、当時、台頭しつつあった中流層の中小規模の住宅であり、かつ、その作風も洋風よりもむしろ伝統的な和風へと、扱う建築もスタイルもそれまでのものとは全く異なる方向へと向かったのである。

大正期以降、建築家たちの扱う建築は、国家的建築から民間の建築へ、住宅も大邸宅から中小規模住宅へと向かい始めていたし、建築様式も様式建築からセセッションなどモダンなものへと移行しつつあった。そうした中で、それまでの洋風一辺倒から伝統的な和風を志向し、あるいは新しい和風の創出を試みようとする建築家たちが出現したのである。

大正期前後の建築家たちの変転の多くは、アプリオリに定められた宿命としての“近代化”を自らのものとする作業であった。保岡の場合も、時代の求めをいち早く感じ取る中で、中小規模の住宅を初めて建築家の領分として見極め、活動を開始したのである。現在、住宅は建築家の重要なテーマとなった。しかしながら、保岡の3年後に東京帝国大学を卒業し、耐震構造学を確立した佐野利器は建築学科のデザイン教育について、幼い時から色や形の善し悪しは婦女子のすることと教えられて育ったこともあって、失望して転科も考えたと述べている［＊5］。この佐野の回顧に端的に見られるように、主婦を相手に生活や住まいを考えるという保岡の変転は、この婦女子の領分に身を投じることであったのである。まさしく、わが国初めての“住宅作家”と称される所以がここにある。そして、彼の変節のおかげで、その後に続く建築家たちは中小規模の住宅を“作品”と呼べるようになったのである。恐らく、保岡にとって住宅の設計は、国家を代表する建築のそれと同等、あるいは、それ以上の価値があったし、女性に合理的な住宅知識を普及させることは、まさに国家の大事であったのである。

■■■

“住宅作家”への道程

a.三菱時代——保岡の卒業設計は「Design for a National Bank」、卒業論文は「Few Glimpse on the Bank Building」と、ともに銀行建築に関するものだった。同期は内田四郎、土屋純一、日高胖（ゆたか）の3名で、それぞれ活躍し、名を残している［＊6］。明治33年（1900）、三菱に入社した保岡は、「三菱合資会社4・5号館」（1902）の建築にかかわった。しかしながら、明治35年（1902）末、大学院進学のために退社願いを提出した［＊7］。大学院での劇場建築の研究や学会活動で充実した2年間を過ごした後［＊8］、再び三菱に入社した。そして、再入社翌年の明治39年（1906）には曾禰が退社したため所長に就任している。また、設計活動のかたわら、明治41年（1908）3月から翌明治42年（1909）1月までの約1年間、「工学研究ノ為」にアメリカ・ヨーロッパに海外視察［＊9］に出かけるなど充実した時を過ごしていた。しかしながら、明治45年、突然、依願退職したのである。その理由は解雇通知に記された「病気」以外に分からない［＊10］。

さて、この三菱時代には、保岡は三菱合資会社8号館から21号館の設計に関与した［＊11］。また、三菱合資会社の「門司支店」（1906）、「長崎支店唐津出張所」（1908）、「大阪支店」（1910）、「若松支店」（1913）なども手掛けた。これらの仕事のうち特に注目されるのは「14号館」（1913）以降、当時の最先端の工法である鉄筋コンクリート構造を採用していたことであり、わが国最初期の鉄筋コンクリート構造による建築の出現であった［＊12］。

一方、こうしたオフィスビルの設計の合間に、住宅の設計も行っていた。すなわち、保岡は、一時退社の直前に「大隈重信伯爵邸洋館」（1902）を設計した。明治34年（1901）に自宅を焼失した大隈は、翌年、新しい住まいとして当時の上流層の間で定着していた、和館と洋館からなる住宅を計画した。洋館は木造平屋でハーフティンバー様式を基調としたものであった。和館の設計には関与しなかったが、洋館には食堂があり、和館の台所の位置や設備は大いに注目していたものと思われる。ちなみに、この大隈邸の台所には、点火も火力の調整も簡単と謳われていた最新式のガスストーブが設置されており、明治36年（1903）の村井弦斎のベストセラーで知られる『食道楽』で模範台所として紹介されていた。後に、保岡は住宅作家として台所設備の必要性を主張するが、新設備の重要性は、恐らく、この大隈邸から学んだものだったのである［＊13］。

また、明治42年の欧米視察の帰国後、岩崎家深川別邸の「池辺茶亭」（現・清澄庭園内の涼亭）［＊14］を設計した。池に迫り出すように配された数寄屋風の建物で、それまで手掛けていた建築とは全く異なる伝統性を意識したものであった。いずれにせよ、保岡の三菱時代の業績は、わが国最初期の鉄筋コンクリート造建築を手掛けるなど輝かしいものであったが、結果的には、本格的な仕事の合間に出会った住宅と数寄屋風の茶亭に、新しいテーマを見ていたのである。

b.事務所時代——三菱の嘱託を終えた大正2年、保岡は個人事務所を開設した。大正3年（1914）の東京大正博覧会の第一会場内の「明治屋売店」などを手掛けていることから、事務所開設当時は、曾禰の協力もあったように推測できる［＊15］。なお、この第一会場の建築はセセッション様式の代表例として知られており、欧米視察の際にウィーンでセセッション建築を視察してきた保岡の経験が発揮できたといえるだろう。

こうした中で、大正4年（1915）、保岡は“住宅作家”の宣言ともいえる『理想の住宅』を出版した。これは“主婦”を読者とした「婦人文庫刊行会」の出版によるもので、鳩山春子・津田梅子ら当時の著名な女子教育家に交じって保岡が担当した［＊16］。この『理想の住宅』は、恐らく、建築家が主婦に向かって書いた最初の本格的なものであったのである。構成は21章からなり、その中には住宅の歴史や住宅用語の解説、製図法の章も含まれており、まさに主婦に住宅建築全般の知識を伝えることが意図されていた。この中で、

岩崎彌之助深川別邸 池辺茶亭（1909）　この庭園は、三菱創設者である岩崎弥太郎の亡き後、弟の弥之助によって社内の親睦園、貴賓接待の場として利用された。1886年に整備を始め、庭池は1891年、コンドル設計の洋館は1889年に竣工した。3代目所長の岩崎久弥は、英国陸軍元帥・キッチナーを歓待するために新たに小亭を建てた。その設計意図として保岡は、①靴のまま入れるように絨毯敷きとした、②内法寸法は6尺5寸だが外国人に低い印象を与えないように障子はすべて艶消ガラスとした、③建物は純日本風とした、と述べている

［＊1］『日本の建築 明治大正昭和 3』（藤森照信著、三省堂　1979）参照
［＊2］三菱社（1893年、三菱合資会社に改称）は、1890年に丸ノ内建築所を設け、オフィスビルの設計に当たることになる。所長は曾禰で、保岡が入社して働いたのもここだった。曾禰が顧問となった段階で、保岡は所長となった。丸ノ内建築所は1910年10月に三菱合資会社地所課営繕係となり、その後、1937年に本社から分離独立し、三菱地所となった（『丸の内百年のあゆみ』（三菱地所社史編纂室編、三菱地所　1993））
［＊3］曾禰達蔵（1852〜1937）
（『INAX REPORT』No.167、p.4〜参照）
［＊4］事務所の名称は、『建築世界』（1913.8）の広告に「和洋建築之意匠設計建築士・工学士 保岡勝也事務所」とある
［＊5］佐野利器（1880〜1956）
1903年、東京帝大卒業後、大学院に進学。1915年、「家屋建築耐震構造論」で学位を取得し、東京帝大教授となる。佐野の回顧は『日本近代建築史ノート 西洋館を建てた人々』（村松貞次郎著、世界書院　1965）参照

［＊6］内田四郎は逓信省技師、土屋純一は大学院に進学後、奈良県技師などを経て名古屋高等工業学校の建築史担当の教育・研究者、日高胖は住友本店臨時建築部技師となった
［＊7］大学院進学は、上司の曾禰も理解を示していた。そのため、曾禰は1902年11月5日に、社長である岩崎久弥に大学院進学のための一時金を与えるべきであるという「贈与金申請書」を出している
［＊8］1904〜05年には、建築学会機関誌『建築雑誌』の編集を担当し、多くの記事を寄せている。その中で、「本邦劇場舞台改良の進路」（1903.12）、および「泰西劇場の火災年表」（1904.2〜5、1905.12）を発表している。これらは、大学院でのテーマである劇場研究の成果の一部と推察される
［＊9］欧米視察の様子を、上司の曾禰（「会員動静」『建築雑誌』1908.6）と三菱の重鎮であった荘田平五郎に手紙で報告している
［＊10］「社史」によれば、「五月二十四日　保岡勝也解雇並嘱託」とあり、保岡は1912年5月24日に退職したが、同時に嘱託として契約している。その期間は「当分」とのみ記されている。なお、この時の1年間の報酬は1,800円であった。ちなみに、入社時の1900年の給料は50円で、1905年12月には月給140円、退職時は185円に昇給していた。『俸段史年表』（週刊朝日編、朝日新聞社　1988）によれば、1907年当時の高等文官試験に合格した高等官の月給は50円であったから、かなりの高額といえるであろう
［＊11］藤森照信は、保岡の業績として、①赤レンガ時代の丸の内を完成させたこと、②クイーン・アン様式の仲通りをつくったこと、③鉄筋コンクリート造を先駆的に展開させたこと、の3点を挙げている（藤森照信『丸の内をつくった建築家たち—むかし・いま』（『別冊新建築 三菱地所（日本現代建築家シリーズ15）』新建築社　1992）
［＊12］保岡は12・13号館の紹介の中で「こういう貸家建築には煉瓦を用いずに鉄筋コンクリートを使用すると壁厚が減じられるので、貸部屋のほうはそれだけ大きくなり、営業上好都合であるわけで、目下建築中の14号館ないし20号館は全部鉄筋コンクリートにするはずである」（『建築雑誌』1911.7）と述べており、14号館以降の建物では、鉄筋コンクリート造を積極的に採用しようとしている様子が記されている
［＊13］保岡は、大隈邸竣工後の1903〜06年、『建築雑誌』に、「室内の採光に就て」、「住家の室内装飾に就て」（1〜11）、「室内の採温及び換気」（1〜5）と、海外文献をもとにした住宅の意匠、および諸設備についての記事を寄せている。この頃から、住宅の研究を独自に進めていた様子がうかがえる
［＊14］作品集『新築竣工家屋類纂』では「深川区所在某邸内池辺茶亭」と紹介されている。ここではその名称に従った
［＊15］東京大正博覧会の第一会場は、曾禰と共同事務所を開設していた中條精一郎が担当していた。このことから、曾禰を介して仕事が依頼されたと思われる
［＊16］保岡と『婦人文庫刊行会』の出会いの経緯は不明だが、既に大隈邸を設計し、また、独立後も岩崎弥太郎の次女と結婚した政治家・木内重四郎の住宅（「木内重四郎邸」（1914））の設計に関与しており、既に建築家としての存在は広く知られていた可能性がある

第八十五銀行本店（1918）　事務所開設時は、金融関連の作品を多く手掛けていた。その時代の様子を示す作品。ルネサンス様式を基調としながらも、ゼブラ模様の付け柱やアーチ、開口部の窓台のデザインなど、サラセン風のモチーフが見られる。保岡の作品の中では、外観の装飾性が豊かな建築であるが、そのデザインは幾何学的な形に単純化されたもので、モダンさがうかがえる。現在、埼玉りそな銀行川越支店として使用されている。登録文化財

保岡は、いかに趣味は異なっていても便利なことは誰も反対しないと、住宅の諸設備の設えの重要性を主張した。具体的には、台所は最も重要な部分であるとし、必要な近代的な諸設備について詳細に紹介した。また、伝統的な住宅と洋館の間取りの紹介でも和洋の違いは問題とせず、間取りの部屋配置や廊下などの位置をもとに、利便性や経済性を重視した。このように、和洋の問題を個人の趣味性として基本的には問わず、機能性や経済性といったことを重視した考え方を明確に示したのである。こうした姿勢をもとに保岡は中小規模の住宅設計を積極的に行い、大正後期には『欧米化したる日本小住宅』と『日本化したる洋風小住宅』を始め、多数の作品集も残し、他の建築家はもとより、一般の人々の住宅への関心を喚起させたのである［＊17］。

茶室建築の研究家へ

施主の趣味性を重視するという姿勢とは別に、実は、保岡自身の趣味性は伝統的な方向に確実に向かっていった［＊18］。そして、それに合わせるように多方面の活動も開始した。すなわち、保岡は、伊東忠太［＊19］らとともに大正8年（1919）の日本庭園協会設立に参加し［＊20］、また、大正13年（1924）に開校した東京高等造園学校（現・東京農業大学）では、茶室に関する講義を担当し、昭和6年（1931）には常任理事にも就任することになる。こうした庭園や茶室への興味がいつ頃からのものかは不明だが、大正12年（1923）の『最新住宅建築』には「他日稿を改めて茶室に関する拙著を公にしたい」と記されており、既に茶室研究の成果を得ていたことが分かる。そして、昭和2年（1927）には『茶室と茶庭』、昭和3年（1928）には造園叢書の『茶席と露地』を刊行することになる。戦前期には和風建築を扱う単行本が多数刊行されるが、その中でも保岡の刊行は極めて早く［＊21］、また、その内容はともに茶道の歴史から始まり、流派、茶室の大きさとその内部、茶庭というように、現存する京都の茶室や茶庭の実測をもとにした研究書的色合いの濃いものであった。

このように、保岡の変転は、住宅作家ではとどまらず、晩年は茶室建築の研究家と称されるまで伝統建築に没頭し、茶室に関する多数の著作を残した。この伝統建築への傾倒も、他の建築家よりも早いものだった。この時期の作風を伝えるものとして、川越に現存する「山崎別邸」（1925）がある。小規模な和洋館並列型住宅であるが、本邸はもとより、庭園と茶室もすべて保岡の手になるものである。洋館部分も魅力的ではあるが、数寄屋の手法を駆使した和館と建物を取り囲む庭園と茶室こそ、保岡の志向性がよく反映されているのである。

結びにかえて　保岡の設計スタイル

保岡は独立後、住宅以外の作品も手掛けた。代表的なものとしては「中井銀行本店」（1917）などの銀行建築や商業建築が多かった。現存する建物が多く見られる川越では、山崎別邸とともに、「川崎貯蓄銀行」（1915）、「第八十五銀行本店」（1918）、「山吉デパート」（1936）を手掛けた。このうち、第八十五銀行と山吉デパートが現存し、山吉デパートの設計図面も残っている。山吉デパートの図面で注目されるのは、外観パースを描いた図面が6種類確認できることである［＊22］。現存する建物は、ファサードにイオニア式の大オーダーを配したルネサンス様式を基調としたものだが、他には、ゴシックを基調としたものや、インターナショナルスタイル風のものが見られる。恐らく、保岡は、数種類の案を用意して施主に見せ、その中から施主の求めるものを選ばせていたのである。それは、利便性や経済性の追求という責任は負いつつも、趣味性は施主の意志を優先させることを意味している。こうした設計方法［＊23］に、独立後の建築家としての姿勢が見て取れるのである。ともあれ、保岡は、商業建築の専門家から住宅作家へ、そして、茶室研究家へと歩んだ。そうした中で、藤井厚二［＊24］のように独自のスタイルを確立させ得たかと問われれば、否と言わざるを得ない。強いて言えば、“和洋折衷”を設計方法として普及させ、和洋折衷化により伝統性を意識した設計の道を切り開いたのである。いずれにせよ、こうした変節により、保岡は一般大衆の生活の器としての住宅が建築家の重要なテーマであることを示し、その後の建築家の活動の場を確実に押し広げたのである。ただ、住宅作家という新しいタイプの建築家像の存在を示した保岡も、晩年は脳溢血で倒れ、昭和17年（1943）8月2日、その変転の人生を終えた。✽（図版解説も筆者）

［＊17］相反する志向の作品集を同時に刊行していることが、和洋といった趣味性に関して問わないという設計姿勢を示しているといえる。なお、その後の1927年にも同様に『和風を主とする折衷小住宅』と『洋風を主とする折衷小住宅』という単行本を同時刊行しており、その意識は変わらなかったことが分かる
［＊18］保岡の著作を見ると、大正末期以降は茶室に関するものが主となっており、興味が茶室に向かっていた様子がうかがえる
［＊19］伊東忠太（1867〜1954）
（『INAX REPORT』No.168、p.4〜参照）
［＊20］「保岡勝也氏を偲ぶ」（『庭園』1942.9）では、「保岡さんは大正昭和の御代に茶室建築の研究家として自他共に許していた大家であった。而して庭についても造詣深く、私どもが庭園協会を起すと直に協力せられ、役員として晩年まで会のために力をつくされたことは今更いふまでもあるまい」と記されている
［＊21］大川三雄によれば、戦前期の茶室に関する単行本としては、1935年の北尾春道の『数奇屋聚成』（洪洋社）が早い例であるという
［＊22］外観パースは1〜6までの番号が付されているが、5の1枚が失われている。現存する5枚には現状の外観に近いものはなく、そのため、この失われたものが現状に近いものだった可能性がある。なお、1〜3は「10.7.18」の記述があり、これから本設計の前の昭和10年（1935）7月18日に描かれたことが推察できる
［＊23］スケッチを数種描いて施主に見せるという方法は、熊本に現存する「長崎次郎書店」（1926）でも行われていた。ちなみに、長崎次郎書店では、異なった外観が4種類描かれたといわれている（「熊本県の近代化遺産」（熊本県教育委員会　2000））
［＊24］藤井厚二（1888〜1938）
（『INAX REPORT』No.173、p.4〜参照）

三菱合資会社若松支店外観　玄関と看板を掲げている最上階はともに増築。外観は極めて質素で、装飾らしきものがないものの、注意深く見ると開口部周囲にはレンガ造を補強する石が配されており、装飾の代わりを担っていることが分かる。こうした外観のデザインも、モダンな吹抜け空間同様にセセッション風といえる。なお、本館の脇のレンガ倉庫も創建時のものという。大正初期の雰囲気を残す貴重な遺構である

三菱合資会社若松支店

［建築概要］
所在地：福岡県北九州市若松区本町1-10-17
規模：地上3階
構造：レンガ造
竣工年：1913年

内部の吹抜けと光天井　2・3階部分の吹抜けの周囲には廊下がまわり、そこから各事務室に出入りできる。吹抜けの周囲には、光天井を支えるように細い鋳鉄製の柱が配されている。2階の柱の上部を帯状の格子で連結しているのに対し、3階の柱は両脇に曲線のブラケットが付き自立している。上部の方がより軽やかなデザインでまとめられており、視覚的にも開放感が感じられる。格子状の光天井は、中央部分が直線モチーフのステンドグラスとなっている。それも含め、全体のデザインはセセッション風で、当時の建築界の流行をそのまま持ち込んだ感がある

北面全景　外壁や破風に柱や長押状の線材がくっきりとその姿を見せる、いわゆるハーフティンバー様式を基調としたデザイン。大隈邸でもハーフティンバー様式を採用しており、保岡の好んだスタイルであったことをうかがわせる。また、屋根が独創的で、中央に配された急勾配の塔屋根や、リズミカルに配された縦長窓の外観は、初期の丸の内のオフィスビルを彷彿とさせる。一方、全体は伝統的な入母屋造りの大屋根のため、遠くから眺めると和風の御殿建築のようにも見えるなど、不思議な印象を受ける

南面外観　南側は海に面しており、その広大な眺望を楽しめるように1・2階に開放的なベランダが配されている。柱の両脇のブラケットには、わずかながらも曲線状の加工が施されており、硬直感を和らげている

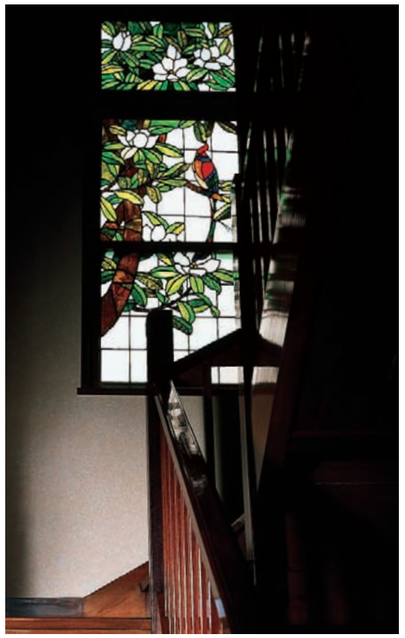
三菱合資会社長崎支店唐津出張所

［建築概要］
所在地： 佐賀県唐津市海岸通7181
規模：地上2階
構造：木造
竣工年：1908年

1908年9月、三菱合資会社長崎支店唐津出張所として竣工したが、1910年には唐津支店に昇格した。平面図は、1908年3月27日の日付とともに、内田祥三と現場監督の小寺金治の印がある。唐津は、顧問であった曾禰達蔵の故郷でもあり、曾禰の関与も考えられる。1980年、佐賀県指定文化財

左──2階ベランダ
右──階段詳細　内部にはほとんど装飾が見られないが、階段部分の手摺子の間に透かし彫りなどの落ち着いた装飾が施されており、訪れる者を2階に誘っているかのようでもある

2階室内　部屋境の大きなガラスの開口部は、オリジナルデザインの勘定台。恐らく奥の部屋は金庫のようなものがあり、この勘定台越しにお金の出し入れを行ったものと思われる



左――応接室　玄関ホール脇に位置する。照明器具は異なるが、家具やカーテン、壁紙などはオリジナルデザイン。花をモチーフとしたステンドグラスは、明治期にドイツでステンドグラスの技術を学び、わが国にその技術を持ち帰った宇野澤辰雄の弟子で、その流れをくむ別府七郎の「別府ステンド硝子製作所」（1920年設立）の作品と思われる
上――階段踊り場のステンドグラス　この住宅の見所のひとつ。テーマは「泰山木とブルージェ」で、ブルージェは鳥の名前である。製作者は、アメリカ系のステンドグラスをわが国にもたらした小川三知。鮮やかな色合いが印象深い。階段の親柱は、簡素ながらもセセッション風のデザインといえる

上――南面外観　建物全体は、2階建ての洋館と平屋の和館がつながる和洋館並列型住宅。なお、山崎家には、陸軍演習の際に11回にわたって皇族が宿泊されている。この別邸の竣工を記念し、1925年11月17日から21日まで梨本宮守正王殿下と李王世子垠殿下が泊まられ、ベランダで撮影した記念写真が残っている
下――茶室　庭先に計画された茶室も保岡の設計。図面に「我前庵写し数寄屋」とある。我前庵とは仁和遼廓亭の別名であり、遼廓亭は織田有楽の作品といわれる如庵の写しである。小町和義は「旧山崎家別邸調査報告書」（伝統技法研究所編、川越市　2007）の中で、茶室の位置や向きから、母屋から庭を通して見える茶室の姿を重視したようであると解説している

山崎別邸

［建築概要］
所在地：埼玉県川越市
規模：地上2階
構造：木造
竣工年：1925年

保岡が川越の作品を多く手掛けることになったきっかけは、亀屋5代目である山崎嘉七との出会いによる。山崎は、交友のあった榮太樓總本舗の社長宅を訪れ、その気に入った住まいの設計者が保岡だったことを知り、以後、かかわりのあった川越貯蓄銀行と第八十五銀行の設計を保岡に依頼し、自らの別邸も依頼したという

玄関　別邸であるため、玄関部は極めて簡素な直線をモチーフとしたつくりとなっている。セセッション風のデザインといえる

客間内観　和館の中でも、最も凝ったつくりの部屋。床柱には北山杉の絞り丸太、他の柱も吉野杉の丸太を用いている。落掛けは桐材、また、床脇の鴨居下の壁止めは亀甲竹。天井の竿縁も三面に竹を張り、縁側境の欄間には算盤竹というように、いろいろ異なった素材を組み合わせたつくりとなっている。付け書院の櫛型窓は桂離宮の新御殿を彷彿とさせるデザインで、障子の組子は細い割竹が縦に吹寄せに配されている

保岡勝也 ドローイング

1

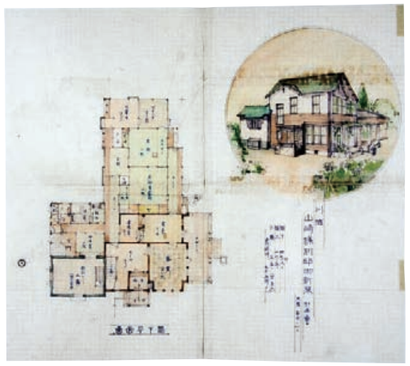
2

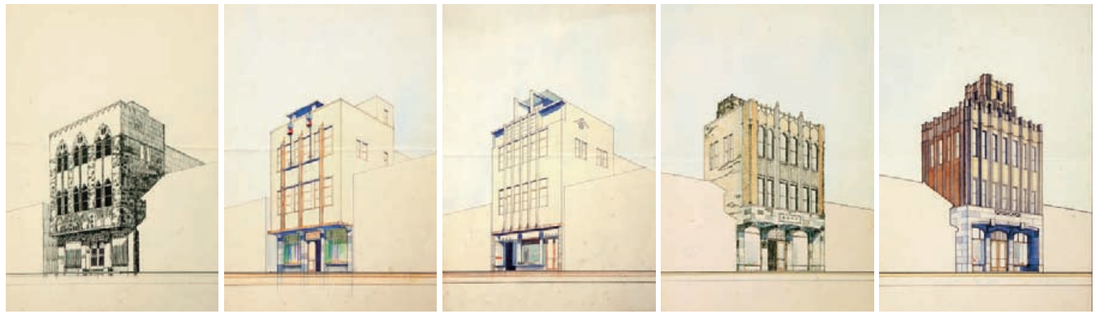
3

4

5

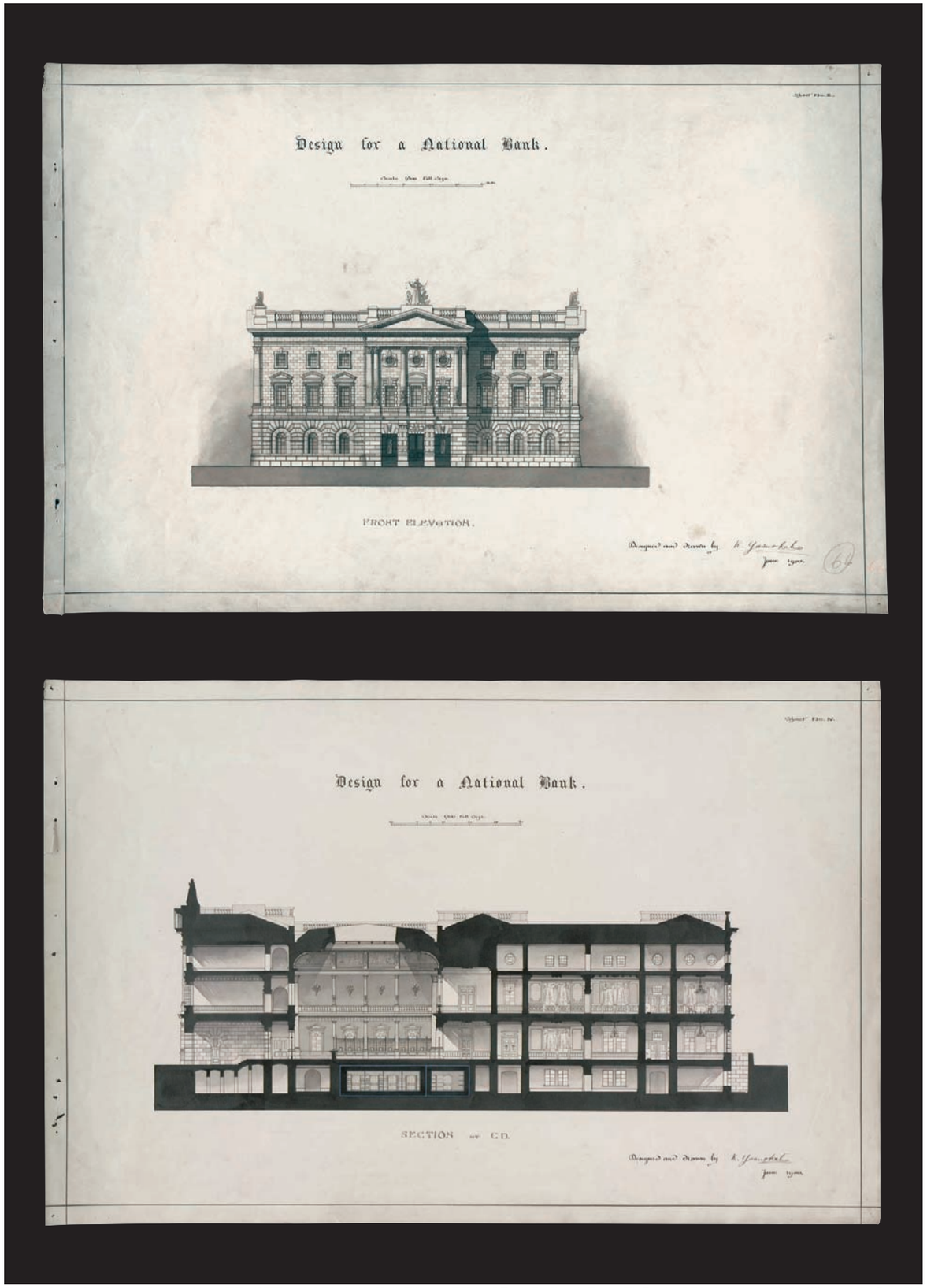
6


7


8

9

1 「純仏蘭西風」の住宅。鉄筋コンクリート造の住宅で、2階の寝室は畳敷きとして計画された(『日本化したる洋風小住宅』所収)
2 1919年竣工の住宅。玄関脇に洋風の"客間兼書斎"が配されている(『欧米化したる日本小住宅』所収)
3 東京郊外に建てられた文芸家の住まい。1926年末に起工したという。子ども室はコルク床、2階には床の間付きの和室も備えられていた(『洋風を主とする折衷小住宅』所収)
4 東京市内の輸入業を営む主人の住まい。台所や風呂はガスを用いていた。2と同様に玄関脇に洋風の"客間"が配されている(『和風を主とする折衷小住宅』所収)
5 『理想の住宅』
6 『最新住宅建築』
7 山崎別邸の初期案スケッチ 初期の平面図と外観スケッチ。基本的な平面構成は実施とほぼ一致している。ただ、外観は、玄関脇の土蔵が2階建てになり、またその外壁の仕上げも異なるなど、現状とは大きく異なっている
8 山吉デパートの設計の際に、保岡の描いた外観スケッチ。キュービックでモダンなデザインも含まれるが、垂直性を強調したデザインが共通している。6枚のスケッチのうち1枚が紛失したという(山吉商事所蔵)
9 山吉デパート(1936) 現在、確認されている、最晩年の作品。構造は鉄筋コンクリート造で、図面類とともに計算書も残っている。ファサードに関しては2007年に復元工事を行った。1階のステンドグラスは、先の山崎別邸と同様に「別府ステンド硝子製作所」の作品



卒業設計「Design for a National Bank」(1900) 立面図と断面図。外観のデザインは、完成して間もない辰野金吾の日本銀行本館と極めてよく似ている。全体のデザインはおとなしく、やや精彩を欠いている。当時のデザインとしては中央部をドームや塔屋で強調するのが一般的であったと思われるが、あえて強調しなかったのは保岡のモダン性の表れともいえるかもしれない(東京大学工学部建築学科所蔵)

保岡勝也 人と作品

1877-1942

略歴

1877年（明10） 東京に生まれる
1900年（明33） 東京帝国大学工科大学建築学科卒業、三菱に入社
1903年（明36） 三菱を退社し、東京帝国大学大学院入学
1904年（明37） 塚本靖・三橋四郎・滋賀重列とともに建築学会評議員兼編輯員
1905年（明38） 東京帝国大学大学院修了後、三菱に再入社。塚本靖・佐野利器・滋賀重列とともに建築学会評議員兼編輯員
1906年（明39） 曾禰達蔵が退社したため所長となる。建築学会評議員
1908年（明41） 「工学研究ノ為」1年間、欧米に出張
1909年（明42） 海外出張から帰国。東京市建築條例起稿委員会委員（委員長は曾禰達蔵）
1912年（明45） 三菱退社。同時に、三菱と嘱託契約
1913年（大2） 銀座に保岡勝也事務所開設
1919年（大8） 日本庭園協会の設立に参加
1924年（大13） 東京高等造園学校講師、「茶室・茶庭」の講義を担当
1931年（昭6） 東京高等造園学校常任理事
1936年（昭11） 「露地と茶室」、「造園設計」の講義を担当
1942年（昭17） 数年前に脳溢血で倒れ、戸塚で静養中に逝去（65歳）。

主な作品

※印は所在不明

1900年（明33） 高崎倉庫株式会社本社11号倉庫（群馬）（設計指導）
1902年（明35） 三菱合資会社4・5号館（東京）（設計関与）、大隈重信伯爵邸洋館（東京）、早稲田大学附属図書館（東京）
1905年（明38） 東京予備病院渋谷分院傷病兵集会所（東京）、慶應義塾商工学校講堂（東京）
1906年（明39） 第2回東京勧業博覧会三菱館（東京）、三菱合資会社門司支店（福岡）（曾禰達蔵と共同設計）
1908年（明41） 三菱合資会社長崎支店唐津出張所（佐賀）
1909年（明42） 岩崎弥之助深川別邸 池辺茶亭（東京）、東京日々新聞日報社（東京）（本野精吾・内田祥三と共同設計）
1910年（明43） 三菱合資会社12号館（東京）（顧問：曾禰達蔵、本野精吾・内田祥三と共同設計）、三菱合資会社大阪支店（大阪）（曾禰達蔵と共同設計）
1911年（明44） 三菱合資会社13号館（東京）（顧問：曾禰達蔵、福田重義・内田祥三と共同設計）、高崎倉庫株式会社本社倉庫1号館・大橋町倉庫（群馬）（設計指導）、静華堂文庫（東京）、柏原洋紙店※（津田鑿と共同設計）
1912年（明45） この年までの間に三菱合資会社21号館までを設計、『新築竣工家屋類纂 第1輯』（編、信友堂）
1913年（大2） 三菱合資会社若松支店（福岡）、三菱合資会社14・15号館（東京）
1914年（大3） 中井銀行浦和支店（埼玉）、中井銀行千住支店（東京）、木内重四郎邸和館（千葉）（設計顧問）、東京大正博覧会第一会場明治屋売店・東亭売店・東京陶磁器同業者組合即売所・守田仁丹休息所（東京）、富山房書肆※、小沢慎太郎商店（東京）、睦屋商店（東京）
1915年（大4） 川越貯蓄銀行（埼玉）、倉持商店※、国分商店※、榮太樓貸事務所（東京）、田嶋屋商店※、合名会社鈴木セメント製造所大煙突※、『理想の住宅』（著、婦人文庫刊行会）
1916年（大5） 秩父銀行（埼玉）

著者の応接室　この写真は、1925年4月に刊行された『小住宅の洋風装飾』に掲載されたものである。この時期、保岡は小石川に住まいを構えていた。その詳細は一切不明だが、この応接室の写真から、暖炉前の衝立や小屏風など、伝統的な工芸品の配された生活の一端をうかがい知ることができる

1917年（大6） 中井銀行本店（東京）
1918年（大7） 第八十五銀行本店（埼玉）、某邸（長崎）、睦屋増築（東京）、鈴木家葉山別荘（神奈川）
1919年（大8） 中井銀行神田支店（東京）、井田商店（東京）
1920年（大9） 某邸※
1921年（大10） 麻田駒之助邸和館（東京）、熊本商業会議所（熊本）、某富豪邸※
1922年（大11） 某富豪邸（神奈川）
1923年（大12） 某邸※、某邸茶室※、『最新住宅建築』（編、鈴木書店）
1925年（大14） 山崎別邸（埼玉）、『小住宅の洋風装飾』（著、鈴木書店）、『欧米化したる日本小住宅』（著、鈴木書店）、『日本化したる洋風小住宅』（著、鈴木書店）
1926年（大15） 長崎次郎書店（熊本）、『洋風小売商店の建てかた』（著、鈴木書店）、『理想の住宅 建築知識』（著、嵩山房）
1927年（昭2） 『和風を主とする折衷小住宅』（著、鈴木書店）、『洋風を主とする折衷小住宅』（著、鈴木書店）、『茶室と茶庭』（著、鈴木書店）
1928年（昭3） 『茶席と露地（造園叢書 第24巻）』（著・日本庭園協会編、雄山閣）
1930年（昭5） 『数寄屋建築（建築資料叢書 第20）』（著、洪洋社）
1932年（昭7） 旧釜浅肥料店母屋（群馬）
1933年（昭8） 『住宅の重要設備』（著、鈴木書店）
1936年（昭11） 山吉デパート（埼玉）、『茶庭の建造物（茶道全集 巻の4）』（著・創元社編、創元社）
1943年（昭18） 『門・塀及垣 住宅の重要設備』（著、鈴木書店）

「某邸」は雑誌で発表されたものを指す。未発表の住宅作品は年表には記載されていないが、多数存在したと考えられる。

取材協力・資料・写真提供
上野海運／唐津市教育委員会／川越市／埼玉りそな銀行川越支店／財団法人東京都公園協会清澄庭園／山吉商事／東京大学工学部建築学科／『新建築臨時増刊 日本近代建築史再考 虚構の崩壊』（新建築社　1974）　（50音順）

＊特に明記のない写真は、2008年5〜6月に新規撮影したものです。

［次号予告］
次号（10月20日発行）の「生き続ける建築」は松田軍平です。